

中越地震後の 集団移転集落における移転決定プロセス ～十二平集落と小高集落の比較～

2012年2月
国際プロジェクト研究室
37106003 池田達哉

主査:本田 利器 准教授
副査:Petr Matous 講師

背景

2

- 2004年、中越地震により
中越地方の過疎地域は深刻な被害を受けた
- 災害復興として集団移転が実施された
- しかし、震災後の限られた時間、情報の中、
コミュニティの維持という点で集団的合理性に
かなった結果を得られている集落は少ない

集落名	集団移転	残留
十二平	91%	0%
小高	72%	4%
首沢	44%	31%
塩谷	31%	49%
蘭木	32%	41%
荷頃	23%	28%
朝日	10%	68%
西谷	8%	90%

- 一方、小高と十二平ではほぼ全世帯が集団移転に参加
 - リーダーの存在、風土などの成功要因を指摘(林、2011 等)
 - しかし、成功要因が住民の選択行動に及ぼした影響や、その影響が
集落内での合意に繋がったプロセスに関する分析は不十分

個人的合理性と集団的合理性の対立の中、
個人的合理性に基づき集団移転参加に至った過程の解明が重要

目的)

小高集落および十二平集落の事例において、個人的合理性に着目し、集団移転の参加に至ったプロセスを明らかにする

手法)

- 文献調査
- インタビュー調査
 - * 日程: 11/15-11/16、11/26-11/27、12/3-12/5
 - * 形式: 非構造化インタビュー(所要90分)
 - * 対象者: 小高集落住民(5世帯/25世帯中)
 - 十二平集落住民(6世帯/11世帯中)
 - 行政関係者(3名)
 - 学術関係者、支援団体(4名)

事例:新潟県旧川口町小高集落

- 震災前)
 - 過疎化や土砂災害への危険意識. 一方、集落内の繋がりを大切にする風土
- 震災後)
 - 10/23 中越地震発生 甚大な被害を受ける
 - 10/26 避難所へ移動 インフラ復旧が困難との認識広がる
 - 11月初旬 **若年層は集団移転を、中高年は復旧が可能な限り残留を希望 集落内の繋がりを大切にする風土が残っていた**
 - 11/20 住民総会開催 Y.K.氏(自治会長)は「全世帯での集団移転」を宣言 一方的な決定に住民から議論のやり直しの要望
 - 11/23 町に集団移転を要望
 - 最終的に、**25世帯中18世帯が参加**
- 移転後)
 - 生活環境向上、経済的支援など現状の評価は低くない (交通の便や雪対策の改善、利子補給、公営住宅の整備 等)
 - 一方、不満の声もある



移転跡地(小高)



移転先(西川口)

- 住民総会前)
 - 若年層 : 集団移転を希望
 - 中高年層: 復旧が可能な限り
残留を希望
 - 全住民: 繋がりを大事にする風土
- | | | | |
|----|------|-------|-----------|
| | | 中高年層 | |
| | | 残留 | 集団移転 |
| 若手 | 残留 | (,) | (x , x) |
| | 集団移転 | (,) | (,) |
- ✓ 「(集団移転は)いい話だなあって. まず若手がなった」(男性・50代)
 - ✓ 「小高に生まれ、小高で死ぬつもりであった」(男性・50代)
 - ✓ 「村のみんなとこれからもつながってほしい」(男性・70代)
- 住民の合理的な選択は
小高の復旧可能性に応じて「残留」と「集団移転」の両方の検討
- 住民総会)「全世帯での集団移転」をY.K.氏(自治会長)が宣言
 - 住民総会后)議論のやり直しは行われなかった
 - 住民の合理的な選択は「集団移転」に変化

強いリーダーシップにより、個人的合理性に基づく判断が
外生的に変化し、集団移転を選択

事例：新潟県小千谷市十二平集落

- 震災前)
 - 若手の転出、高齢化、過疎化が進む一方、高齢者の転業は困難
- 震災後)
 - 10/23 中越地震発生 甚大な被害を受ける
 - 10/24 避難所へ移動 立ち入り規制から一時帰宅の要望高まる
 - 11/3,10 一時帰宅 T.S.氏による市、県との交渉の結果、実現
 - 11月中旬 制度に対する過度な期待の醸成
 - 11月下旬 誤解の解消 集団移転は容易ではないとの認識醸成
中若年層は個別移転を、高齢者は残留を希望。高齢者には将来の不安も
 - 12/5 仮設住宅入居
 - 12月 住民会議開催 制度制約下で、全11世帯が離村、集団移転に合意
 - 3/10 市に実施の要望
- 移転後)
 - 生活環境向上、経済的支援
(交通の便や雪対策の改善、利子補給、雪害補償 等)
 - 現在、比較的満足している



移転跡地(十二平)

「震災後集団移転の成功要因」より



移転先(三仏生)

「震災後集団移転の成功要因」より

リーダーへの信頼に対する共通認識の醸成

7

- 十二平への立ち入り規制により、一時帰宅への要望が高まっていた。T.S.氏が市・県と交渉の末、一時帰宅を実現
 - **T.S.氏の行政交渉力に対する信頼醸成**
 - ✓「農業委員やったり、行政に一番くわかったし、十二平としては最高だった」(70代男性)
 - **「行政関係の(複雑な)問題では、T.S.氏を信頼する」というメタ戦略醸成**
- 集団移転制度に関する住民の誤解の解消、同制度の住民への説明等でもT.S.氏は中心的な貢献
 - **「T.S.氏を信頼する」というメタ戦略は集落内で共有、補強され、共通認識化**
 - ✓「T.S.氏は先にたって教えてくれて、役所の人にお前タイムカード押してきたかっていわれるくらい(市役所に通っていた)」(男性・70代)
 - ✓「T.S.氏がしっかり、頭がいいから。絶対服従じゃないけど、さからって反対するのは(ない)」(男性・70代)
 - ✓「(制度内容なんて)ほとんどわかんね」(男性・50代)
 - ✓「T.S.氏に寄せる信頼感は強いなって印象はあります」(女性・20代)

移転決定プロセス

8

- 1) 残留か離村, 2) 集団移転か個別移転の2段階で「集団移転」を決定
- Step1: 残留か離村
 - 中若年層: 個別移転を希望
 - 高齢者: 残留を希望. 中若年層と同じ選択をとる必要があった
 - *「みんな個人個人で土地買って出ないといけないねって感じ」(女性・50代)
 - *「年配の人は出たくないのが本音だと思うけど、年取って子供に世話にならないといかんとって(離村を決意)」(女性・50代)

- **住民会議の結果、個人的合理性に基づき、全戸離村に合意。**
- **ただし、個別移転が念頭**

		中若年層	
		残留	離村
高齢者	残留	(,)	(× ,)
	離村	(× ,)	(,)

■ Step2: 集団移転か個別移転

中若年層 : 個別移転を希望

高齢者 : 集団移転を希望

T.S.氏 : 集団移転を支持

- * 「そう(個別移転)した方が手がかからない」(男性・50代)
- * 「自分たちの好きなようにしたらって言われてもどうしようもできない」(男性・70代)
- * 「(集団移転するなら)みんなで一つになった方が有利だって」(T.S.氏)

集団移転事業には
制度制約や行政に関わる不確実性が存在

		中若年層	
		集団移転	個別移転
高齢者	集団	(,)	(,)
	個別	(× ,)	(× ,)

□ 住民の合理的な選択は個別移転

□ しかし、「行政関係の問題では、T.S.氏を信頼する」という共通認識による
集団移転の期待効用の向上

- * 「T.S.氏が制度の説明を、こんなことしたら、こんなことが色々と受けられるからって」(男性・50代)

→他の住民も集団移転を選択するだろうという共有予想を形成, 合意に

- * 「T.S.氏がいなきゃ、誰もわからない、こんなに纏まれんかった」(男性・50代)

「リーダーを信頼する」という共通認識によって、
個人的合理性に基づく判断が内生的に変化し、集団移転を選択

個人的合理性と集団的合理性

■ 十二平

「T.S.氏を信頼する」という共通認識により、
内発的な判断で集団的合理性のある集団移転を選択

- 「T.S.氏がいなきゃ、誰もわからない、こんなに纏まれんかった」(男性・50)

→ **個人的合理性と集団的合理性は整合**

■ 小高

Y.K.氏の強いリーダーシップにより、
残留も含め議論されるとの内発的な判断に反し、集団移転を選択

- 「新聞にはでる、テレビにはでる。動けない。それはもう私たちには取り消し
がつけられないものだと思っていた」(女性・60代)

→ **個人的合理性と集団的合理性は非整合**

その結果、住民の不満の一要因になった可能性がある

- 「長岡にいた人が(住民総会に出て)いれば、少しは変わったかもしれない」(女性・60代)

- 震災後の混乱期において、住民がどのような個人的合理性に基づき、集団的合理性のある集団移転に参加するに至ったのか、そのプロセスを明らかにした。
- 外生的に集団的合理性のある集団移転を実現した場合、当初の個人的合理性に基づく判断と整合していないことが住民の不満の一要因になる可能性がある。個人的合理性に基づく判断と移転決定プロセスが一致する状況を整備することが重要であるとの示唆が得られた。

ご清聴ありがとうございました